〔生化学　第74巻　第4号，p. 281，2002〕

アトモスフィア

支部活動の活性化

山本郁男*

「永びく不況下，熱海のある有名ホテルではその打開策として旨い蟹料理の食べ放題，お値段8800円也を打ち出し，自前で宣伝したところ今や押すな押すなの大盛況，その収入は1億数千万円に達したとか」．

冒頭から生々しい変な話で恐縮であるが，ホテルを支部に言い換えると，何かsuggestiveではないかと思った次第である．

今や御多聞にもれず，わが学会も，このところ会員の減少が目立ち，これから先，どのような活性化を打ち出していくかが問われている．勿論，本部の様々の施策が要求されるが，会員の約6割を占める支部（関東支部を除く）がどの様な活動をするかは重要なポイントとなる．何故なら，若い研究者が最初に触れるのは，彼らが所属する支部の活動に他ならないからである．従って，そこでの初体験が会員になるか否かの決め手となる．若き頃の自分を思うに①生化学会の発表は確かに最初は理解しにくかったが次第に虜になっていった．②座長は若手が行い，なんとなく活気があった．③本当に研究が好きな人の集まりにみえた．④この学会に入らないと何だか損をするぞと感じた．私にとって会員になることはその世界に飛び込むことであり，誇りすら感じたものである．

生化学は生命科学分野では最も体系化されており，勉強すればするほど，研究すればするほど興味が湧く．未知分野はまだまだ多く，新技術を導入すれば新しい発見の宝庫であり，若い人の好奇心を誘うには十分の学問領域である．支部例会の口頭発表の場で自信を持ち，若い会員が不安ながらも大会に自分の研究を出し，まとめてJ. Biochem.等に投稿，この分野で学位を取得し，外国に出る．このような順序だったステップは現在でも当然必要であろう．この場を提供するには地方支部しかないと考える．地方こそ研究の拠点であることを今一度再認識する必要がある．会員を中心とするチームワークがとれればとれるほど研究の質とレベルは向上する筈である．

本学会は今年75回の歴史をきざむ大会を開催する．会員の中には世界有数の科学者もいる，もう少しでノーベル賞という先達も五指を数える．基礎学問としての生化学は，いうまでもなく医，理，薬，農，歯，獣医，看護，工学等の重要な支柱である．換言すれば，生化学を通らずして，上記学問は成立しないといっても決して過言ではない．21世紀は治療と予防の世紀といわれるがその根幹にあるのは生化学であって，これなくして応用としての治療予防学の発展，進歩はない．今こそ本学会員はそれ位の自負と自信を持つべきであろう．最近一部の会員が分子生物学分野に流れているとのことで本学会の将来を憂える声が聞かれる．だが，われわれは今こそ気概と勇気と希望をもって進むべきと考える．

北陸支部は会員約350名という最小支部であるが，昨年5月と11月に2回のシンポジウムを持った．一つは「シトクロムP450」他の一つは「神経の再生，分化」で参加者は400名を超えた．また同時に開催した支部例会も演題を断る程であった．北陸支部には若手育成のための「米山賞」という奨励制度も持っている．年会が大都市に決まっているのであるから，例会をもう1回増やしたい．一つは温泉などに会場をあて一泊二日の中で親交を深めるのもよいだろう．そのためにも地方と中央との連絡を密にし，地方の異質性と特徴をよく把握した強力な支部長をたて，若手養成（特に大学院生）を最大事としていくことが重要であろう．何よりも活気ある，そして魅力ある学会にしなければならない．まだまだ努力と工夫が足りないように私には思える．さらに会長をはじめとする役員は地方にも目を配り，支部活動の自立性を育てる精神的，経済的援助を期待するものである．

*日本生化学会北陸支部長，北陸大学薬学部教授